

日本の学校事故は「コピペ事故」？

以前、NHKスペシャル「いのちを守る学校に 調査報告“学校事故”」（2023年5月7日放送）で、日本スポーツ振興センターの2005年度以降のデータベースを元に学校事故を分析すると、学校管理下で死亡または障害を負った子どもの数は8,729人にのぼり、窓からの転落事故、運動会の事故、熱中症など、「同じような事故を繰り返す（コピペ）」という実態が明らかになったということを知りました。当然、事故発生時の学校は負傷者の救護、保護者や教育委員会への連絡など、精一杯の対応を行っているはずなのですが、残念ながら「再発防止」の観点が欠けているということだと思います。どうすれば子どもたちを事故から守り安全な学びの場を実現できるのか？3段階のリスクマネジメントの考え方を紹介します。

<第1段階>事前マネジメント（リスクマネジメント）

目的: 危機発生の可能性を低減し、発生時の影響を最小化する

主な活動:

- ①リスク評価: 組織を取り巻く内外のリスクを網羅的に洗い出し、その発生確率と影響度を分析
- ②予防策の策定: リスク要因の排除、脆弱性の改善、代替手段の準備など
- ③危機管理体制の構築: 危機対応チームの編成、責任と権限の明確化、トレーニングの実施

<第2段階>発生時マネジメント（クライシスマネジメント）

目的: 組織やステークホルダーへの被害を最小限に抑え、混乱を収束させる

主な活動:

- ①情報管理: 状況の継続的なモニタリング、関係者への正確かつ迅速な情報発信（広報戦略含む）
- ②意思決定と指揮: 事前に策定した計画に基づき、状況に応じた柔軟な判断と指示系統の確立
- ③資源配分: 限られた人的・物的資源を、最も効果的な対応に集中させる

<第3段階>事後マネジメント（事業継続マネジメント：BCM）

目的: 事業の早期再開、信頼の回復、将来の危機への備えの強化

主な活動:

- ①事業復旧: 損害を受けた機能や設備の復旧、サプライチェーンの再構築などによる事業再開
- ②原因分析と検証: 危機発生の原因究明、対応プロセスの評価、改善点の特定
- ③学習と改善: 得られた教訓を組織の知識として蓄積し、危機管理計画や体制に反映させる

一度、危機的状況が発生すれば心身共に疲弊してしまいがちですが、状況が落ち着きを見せた時点での第3段階の視点がとても大切。“対岸の火事”“喉元過ぎれば…”にならないようにしたいものです。（高橋）



困難課題対応的 生徒指導のポイント

これまで生徒指導Leaflet@OKAYAMAでは、まずは、生徒指導の基盤づくりに関する共通理解を図っていただきたいの思いから発達支持的生徒指導の考え方と取組に重点を置いて発刊してきました。

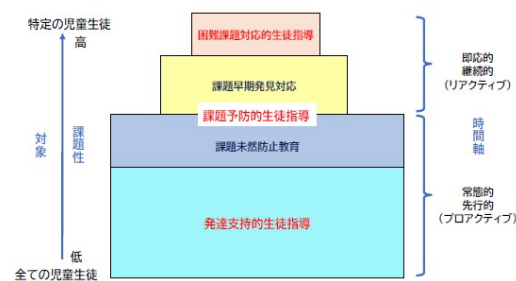
一方、学校現場では、困難課題への対応で、日々、苦慮されていることも事実です。個別具体の対応については、『提要』第Ⅱ部の各章を参照していただきたいのですが、2号に渡ってこれまで触れることができなかった発達支持的生徒指導以外の生徒指導を進める上でのポイントを解説します。各校の取組の検証と次年度の計画立案の際の参考にできれば幸いです。

Q. 「困難課題対応的生徒指導」を行う時のポイントを教えてください。

A. 4層構造の最も上に位置【図】する「困難課題対応的生徒指導」は、『提要』で次の様に記載されています（『提要』P.21）

いじめ、不登校、少年非行、児童虐待など特別な指導・援助を必要とする特定の児童生徒を対象に、校内の教職員、警察、病院、児童相談所、NPO等の関係機関との連携・協働で行う課題対応

特定の児童生徒が抱える深刻な課題に対し、個別の指導・援助を行う「困難課題対応的生徒指導」の段階では、担任一人の力や学校単独での対応には限界がある場合があります。何より大切なのは、個人の勤と経験に基づく対応ではなく、法や根拠に基づく組織的な対応を行うために、対応の度に『提要』の関連ページを確認しながら対応することです。提要では組織的な対応を行うために次のようなプロセスが示されています。



1. **判断とアセスメント**： ケース会議を開き、情報を収集・分析して支援の方向性を決める。
2. **目標の共有**： 長期目標（自立）と短期目標（スモールステップ）を関係者で合意する。
3. **チーム支援計画の作成**： 「誰が・いつ・どこで」支援するかを明確にする。
4. **実践**： 計画に基づき、各専門性を生かした役割分担で実行する。
5. **点検・評価**： 定期的に状況を振り返り、計画を修正・継続する。

BPSモデル (Bio-Psycho-Social Model)

児童生徒の課題を、生物学的要因、心理的要因、社会的要因の3つの観点から検討するアセスメント方法

(例) 不登校
 「生物学的要因（発達特性、病気等）」
 「心理的要因（認知、感情、信念、ストレス、パーソナリティ等）」
 「社会的要因（家庭や学校の環境や人間関係等）」
 から実態を把握すると同時に、児童生徒自身のよき、長所、可能性等の自助資源と、課題解決に役立つ人や機関・団体等の支援資源を探ります。
『生徒指導提要』P.91

そのポイントとしては、

▶多角的な情報収集

色々な角度から情報収集します。その際、左のBPSモデルを参考に、専門家の知見も得ながら情報を収集します。

▶肯定的な注目

課題に目を向けることは大切ですが、児童生徒の良いところにも目を向け、積極的に伝えましょう。小さな進歩でも具体的に褒めることで、児童生徒自ら改善していくことを支えます。

▶役割分担と連携

個人で抱え込まず教師集団で協力し、役割を明確にすることが重要です。課題の深刻度に応じたチーム形態（「機動的連携型支援チーム」「校内連携型支援チーム」「ネットワーク型支援チーム」※）を選択し、支援の輪を広げます。

※詳細は次号（No35.コラム参照）

▶共通理解と一貫した対応

対応方針は、チームで共有し一貫性を持たせることで、児童生徒や保護者は安心できます。定期的に話し合い、状況に合わせて柔軟に見直す姿勢も大切です。

▶段階的な目標設定

今日（今週）できることなど、具体的な短期目標を立て確実に達成し成功体験を積み重ねていきます。あわせて、最終的にどのようになりたいか、長期目標を児童生徒と一緒に考え共に目指します。

▶個別指導と集団指導の使い分け

児童生徒の状況に合わせ、じっくりと向き合う個別指導と、他者との関わりを通して社会性を育む集団指導を共に重視します。

目前の課題を解消するだけでなく

「困難課題対応的生徒指導は、生徒指導の構造としては「リアクティブ（即応的・継続的）な生徒指導」の位置付けですから、

- ①課題が起き始めたことを認知したらすぐに対応する（即応的）
- ②課題に対して組織的に、解決まで粘り強く取り組む（継続的）

ことが何より大切ですが、必ず「どうすれば同じような困難課題が起きないようにするのか？」という点にも意識を向け、改善策・再発防止策を検討・実行する習慣を組織的に身に付けたいものです。

POINT

再発防止策の検討までが、困難課題対応的生徒指導

「ケース会議」を直ちに開催する

「解消」はゴールではない